

総合人間・文化学部に期待するもの

山崎 正和

東亜大学・学長

東亜大学 総合人間・文化学部 比較文化学研究室

総合人間・文化学部が誕生したが、いうまでもなく、「総合人間文化学」という学問があるわけではない。人間や文化を丸ごととらえ、その全体を知りたいというのは、知識本来の願いであった。しかしそれは簡単なことではなく、安易に行えばただの常識にもどってしまうのは明らかだからこそ、古くから学問は専門分野を分化させてきたのである。

専門分野はたんに対象を部分に割って分担しただけでなく、それぞれ独自の認識方法を発展させてきたから、その成果を繋ぎあわせて対象の全体を知るということも難しい。スポーツ学と臨床心理学は、人間のからだと心を分け持っただけでなく、人間へのアプローチの仕方そのものが違うのだから、足して2で割っても人間の全体は見えてこない。かねて学際的研究とか教育という言葉が語られてきたが、めだつた実があがったように見えないのもそのためだろう。真に学際的な分野を開こうとすれば、複数の分野を貫く共通の方法の開発、いいかえれば新しい統一的な学問分野の新設をめざさなければなるまい。

とはいえ、学問がなるべく広い視野を持って、多くの角度から対象に迫るほうがよいことは疑いない。とりわけ教育の局面では、学生をいわゆる「専門馬鹿」にしないように、複眼的な思考力を育てることが肝要だろう。もっとも、ここでも旧来の「教養」教育や、それを言い換えた「共通」教育があまり役に立つとは、私には思えない。ほかでも書いたことだが、体系的な教養の概念は19世紀で終わっていて、あらゆる学問に共通の基礎知識というものは存在しない。へたをすると共通教育は雑学のごった煮、水で薄めた専門教育の羅列に陥る恐れが強いのである。

それよりはこのさい欧米の「副専攻」の考え方を借りて、学生に専攻の分野から遠いいくつかの課目を選んで学ばせたほうがよい。専攻とはできるだけ方法の異なる学問を選ばせ、異質の思考能力、複線的な想像力を育てるのである。その点では健康学から比較文化論までを含む、わが学部の多彩なカリキュラムは大いに有益だろう。教師がしなければならぬのは、学部全体の開講課目を見渡し、なるべく専攻から距離の大きい課目を選択するように、学生を指導することである。

もちろん、研究の面でも視野の拡大は望ましいが、こちらはあまりあせっても実りは少ないだろう。知識の総合化はそのまえに深い専門研究が不可欠であって、これを一人で進めるには長い時間がかかる。かといって性急に学際的共同研究をくわだてても、学問の中途半端な折衷に終わる心配がある。視野の拡大はむしろそれぞれの専門研究のなかで、つねにその専門の意味を問うという内

面的な作業から始めるべきだろう。大切なのは、自分の専門が他の専門との関係において、あるいはより広い学問分野の地図のなかにおいて、どんな意味を持ちどんな位置を占めているかを、たえず反省することなのである。

しばしば研究助成の審査にあたって気づくことだが、研究者のなかには自分の専攻分野の存在を当然視している人がじつに多い。なぜその専門を選んだのかについて、ただその専門があったからだと考えている人があまりにも多い。そうでなければ、学問の意味と功利的な価値をとり違え、それが何の役に立つかということしか考えない人もいる。学問の意味とは、当の専門が隣接の専門とどんな風に関わり、どんな風に補足しあい競争しあうかという関係のことである。それを研究者が十分に反省し自覚していれば、第一に自分の専門についてより強い緊張感を持つことができるし、やがては専門間関係を意識的に強化して、知識の総合化に向かうことも可能になるだろう。一度でもよい、自分の専門の成立の必然性を疑い、不安を覚えるところから知的な視野は初めて広がるのである。

そのためにも、隣室に異分野の研究者のいるわが学部は恵まれている。ときに暇があったら、自分の研究対象が隣人にとってどんな意味を持っているか、想像して見ることにしよう。健康論の「健康」は、不摂生な詩人をテーマにしている文学研究者にとって何であるか。その詩人の高貴なる心の悩みは、臨床心理学者の目にはどう映っているか。逆に心理学が診断する心の異常や正常は、文化や時代が変わればどんな意味を持っているか。また比較文化論や地域学が問題にする特定の文化は、そもそも誰の目にも自明な存在なのだろうか。はたして「日本」は存在するのか、フランス人にもポリネシア人にも共通の「芸術」というものはあるのだろうか。

すべての学問は社会の通念に逆らい、常識を覆すことを使命として発展してきた。しかし文化の学はたとえば幾何学とは異なり、学問が自分の対象を自分で定義して出発することはできない。幾何学が「点とは位置だけがあって大きさのないもの」と言うように、文化論が文化の定義を自分だけで決めても、かえって常識の失笑を買うだけであろう。文化の学は常識を覆すにしても、まずは常識を受け入れ、それを洗練するところから出発しなければならない。逆にいえば、文化の学はたえず常識にたいしてみずからを説明し、それが意味ある営みであることを訴え、その理由を説きつづけなければならないのである。

自分の学問へのこうした反省は、まずは一人一人の研究者の胸のうちで始まればよいことであろう。学問の擁護は外にたいして行うものではなく、学問それ自体の内に向けてなされるのが本旨であろう。しかしせっかくこういう新しい学部ができたのだから、そのうちにもし自然な機運が盛りあがれば、学問論を話題にして学部内で茶話会などを試みるのも面白いかもしれない。